

ライカにはスプリングのついた二つのテイクアップローラーがあります。ひとつはクロージングカーテン用でカメラのフロント側にあります。カメラの底蓋を開けるとフィルム装填の絵のあるプレートがあります。スクリューで留められているこのプレートを取り外します。中に、ウォームギアで調整できるテンションセット調整機構が見えます。大変精密にセットすることができます。スクリュードライバーを斜めの方向から差し込んでこれらを回します。簡単です。ライカのフラッシュシンクロモデルではシャッター調整の初歩のひとつとして、シャッターを最高同調スピードにセットし、ストロボをカメラの前で焚いてチェックする方法があります。フィルム室が近くに見えるようにして発光しフィルム室が完全に開くかどうかを目でチェックします。これ以上のスピードでもフィルム室が完全に開いて見えるようならもっとテンションを強める必要があります。また、1/1000 秒でスリット幅が平行であるかどうかその動き(発光)の中で確認することができます。家庭のリペアマンは古いフィルムに撮影して、正しいシャッター、例えばコンパーシャッター、で撮影したものとネガの密度を比較してシャッターを計ることもあります。

安くてもいいシャッターテスターもあります。CMR がその一つです。フィルムでもライカをテストすることができます(TV やネオンライトを写す)。これらのテストは、毎回調整するたびに再組み立てをしなければなりません。もしあなたもテイクアップローラーのテンションを増加するだけならカメラを裸に分解する必要はありません。底の絵のあるプレートを外すだけでできます。シャッターを巻いたまま長く使わなかったカメラは各々のウォームギアのテンションをわずかに増やしてやる必要があります。

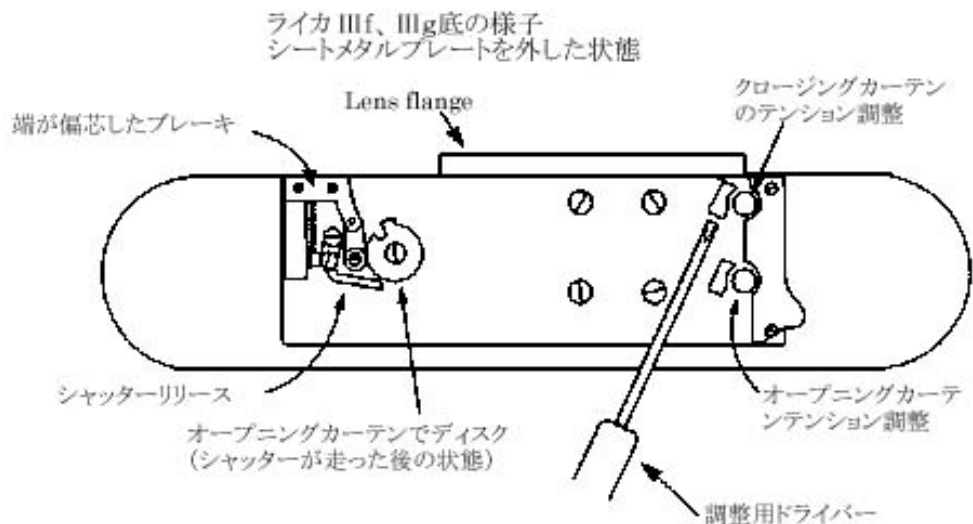
トルクレンチがあればファーストカーテンを 11 オンスに、セカンドカーテンを 8 オンスにセットすればいいでしょう。または、正常なライカのテンションと比較することもできます。

シャッタースピードテスターのベストのひとつは TV スクリーンです。TV の走査線がよく見えるくらい近づいてピントを合わせます。走査線は1秒間に 15750 本あります。したがって画面の垂直線上に 157.5 本あれば 1/100 秒という

ことになります。TV の一回のフレームは 525 本のラインとギャップ時間があります。そのため数枚写します(ギャップのため写らないコマもあるので何枚か写しておく)。

もしクロ - ジングカーテンのテンションが強すぎるとオープニングカーテンに追いつきます。その結果写真の最後の方は何も写らなくなります。もしオープニングカーテンのテンションがあまり強すぎると写真の後半がオーバー露出になるでしょう。ネガは最後の方でより暗く(黒く)なります。また、オープニングカーテンが急に止まるのでバウンスバック(跳ね返り)が生じることもあります。その結果フィルム上に線が残ります。

ボールベアリングのついたライカ、後期モデルではオープニングカーテンの走行の最後の方でブレーキが効いてスローダウンするようになっています。シャッターが走るとカメラの底にあるディスクが半時計方向に回転します。これはオープニングカーテンのドラムとピン&ホール機構に連結されています。カーテンが終わりに近づくとカムのように広がって車のブレーキシューと同じような小さなレバーを動かします。ディスクを支えている偏芯したホイール(輪)を弛めて回すことによってこのブレーキをセットすることができます。ブレーキアクションがなくオープニングカーテンがバウンス



するときはこの調整を行います。

古いライカにはこのブレーキとディスクがありません。後期のスクリューマウントライカは、この丸いディスクにあるノッチ(窪み)とキャッチがシャッターの働きを助けていることを覚えておきましょう。メインリリースはカメラの内部にあり、ロッドがフィルムスプロケットを通して上からきています。